

ハディース入門 (4) – ハサンとダイーフ

マラヤ大学イスラーム学アカデミー博士課程 大木博文

はじめに

前回のサヒーフに続いて、今回はハディースの信憑性に基づく分類のうち残りのハサンとダイーフについて検討する。

1. ハサン

定義をめぐる諸見解：「美しい」という意味を持つアラビア語の「ハサン」の専門用語としての定義については大きく3つの見解がある。①「伝承経路が明確に示されていて、それを構成する伝承者が皆よく知られた人物であり、大半のハディースが対象となり、大半の学者によって受け入れられ、法解釈学者たちによって広く利用されているもの」(アルハッタービーの定義)②「伝承経路の中に嘘をついていると疑われるような人物が存在せず、信頼できると認定された伝承者によって伝えられたハディースと相反する内容が認められず、いくつかの同様な伝承経路によって伝えられた全てのハディースをハサンという」(アッティルミズィーの定義)③「サヒーフの定義(前号の論考「ハディース入門 3 – サヒーフ」参照)のうち、伝承者の厳格性についてサヒーフと認められるものよりも若干劣るもの」(イブン・ハジャールの定義)広く認められている定義は③である。

ハサンの地位：法的論証性については、ハサンとサヒーフの間に差異はない。ハサンを伝えた者の中には伝達における厳格性に若干の問題を持つ者が含まれているが、その度合いが限りなくダイーフに近くない限り、ハサンに法的論証性を付与するという見解は、法理論学者の間でもハディース学者の間でも一致して支持されている。

ハサンの中にも、その信憑性の高低にはかなりの幅が認められる。ハサンの中でも特に信憑性が高いハディースは、次に示す伝承経路を持つものであるとされている。

1. バハズ・イブン・ハキームからその父を経て、その祖父へと遡る伝承経路
2. アムル・イブン・シュアイブからその父を経て、その祖父へと遡る伝承経路
3. アッタイミーからイブン・イスハークに伝えられたもの

また上記以外の伝承経路でも、類似の伝承経路を複数持つものは、最もサヒーフに近いハサンであると判断するのが妥当である。

ハサンとサヒーフの用語使用法：「伝承経路がサヒーフのハディース」あるいは「伝承経路がハサンのハディース」という表現のみが用いられて「このハディースはサヒーフである」あるいは「このハディースはハサンである」という表現が使われていない場合は、その判断は伝承経路についてのみ検討した結果を示しており、そのハディースの本文の信憑性については何ら検討を加えていないということを暗示している。またアッティルミズィーの『スナン集』には「ハサン・サヒーフのハディース」という表現がしばしば見受けられるが、イブン・ハジャールによればこうした表現は「二つ以上の伝承経路を持つハディースなら、ある伝承経路がサヒーフと認められ、別の伝承経路がハサンとみなされる」場合に使われるか、あるいは「伝承経路が一つしかない場合に

は、ある人々にはハサンとみなされるが、他の人々にはサヒーフとみなされている」場合に使われる。

アルバガウィーは、その著『スナナの灯火』において「サヒーフ」と「ハサン」を全く別の意味で用いている。彼はアルブハーリーとムスリムの両『サヒーフ集』に収録されているか、あるいはそのいずれかに収録されているハディースを「サヒーフ」とみなすし、それ以外の4書(アブーダーウード、アッティルミズィー、アンナサーイー、イブン・マージャの『スナン集』)に収録されたハディースは「ハサン」としている。「サヒーフ」と「ハサン」にこうした意味を持たせるのは特別な例といえるが、アルバガウィーの著作もハディース学研究においては必読文献であるので、十分な注意が必要である。

ハサンを多数収録する主要ハディース集：ハサンを多数収録している主要ハディース集として、アブーダーウード・アッタイリシーの『ムスナド集』、アハマド・イブン・ハンバルの『ムスナド集』、アブーダーウードの『スナン集』、アッティルミズィーの『スナン集』、アッダーラクトゥニーの『スナン集』、アルバガウィーの『スナナ註解』と『スナナの灯火』、アルバイハキーの『大スナン集』等を挙げることができる。

「それ以外によってハサンとみなされるハディース」：上記のハサンは、厳密には「ハサン・リザーティヒ(それ自体によってハサンとみなされるハディース)」と呼ばれ、ハサンとみなされる要因がそれ自体の伝承経路、または本文の中に見出されるものを指している。それとは別に「ハサン・リガイリヒ(それ以外によってハサンとみなされるハディース)」と呼ばれるものもある。「ハサン・リガイリヒ」とは、それ自体はダイーフであるが、別に多くの、より信憑性の高い伝承経路が存在するためにハサンとみなされるハディースのことで、ハサンとダイーフの中間に位置するものである。ハサン・リガイリヒとみなされるためには、ダイーフとみなされる根拠が伝承者の暗記力の弱さか、伝承経路の断絶、または伝承者の素性に不明瞭な点があるという場合に限られる。悪行や嘘偽で知られる者が伝達に関与している場合には、その他にいかなる理由があったとしてもハサン・リガイリヒとみなされることはない。当然のことではあるが、ハサン・リガイリヒには法的論証性が認められている。

2. ダイーフ

伝達の信憑性に疑義が持たれるために受け入れることのできないハディースは、ダイーフと呼ばれる。ダイーフとは、字義的には「弱い」という意味である。多くのハディース学者は改竄されたものでなく、ダイーフ性が弱ければ、ダイーフでも参照・採用できるとしている。一方でイスラームの信仰箇条、信仰行為や法的判断に関わるものでは参照も不可とする見解が多い。以下はダイーフとみなされている伝承経路の中でも、特にその信憑性に強い疑義が持たれているものである。

1. アブーバクル・アッスィッディークに遡る伝承経路の中では、マッラトゥッ・タイェブ、フィルカド・アッスブヒーを経てサダカ・イブン・ムーサー・アッダキーキーに達したもの。
2. シリア人の間で口伝されたものの中では、アブーアマーマか

らアルカースィム、アリー・イブン・ヤズィード、ウバイドゥラー・イブン・ザフルを経てムハンマド・イブン・カイス・アルマトゥループに達したもの。

3. アブドッラー・イブン・アッパースに遡る伝承経路の中では、アブーサーレフからアルカルビー、ムハンマド・イブン・マルワーンに伝えられたもの。

ダイフの種類：ダイフは大きく「伝承経路の欠落によるもの」と「伝承者の信憑性によるもの」に分けられる。以下、代表的なダイフの種類について簡単に説明する。

①**ムルサル：**字義的には「解放されたもの」を意味し、専門用語としては「ある伝承者が不詳のままに伝承経路が伝えられてしまったもの」を指し、ハディース学者たちの間では、預言者とタービイーの間に介在しているはずの伝承者が知られていない伝承経路を指す。タービイーが「預言者は次のように言われた」とか「私は預言者が次のようになされているのを見た」と発言しているものがこれに属する。一方で法解釈学者や法源学者たちはムルサルをより広範に解釈し、「特にその最初の段階において、伝承経路に何らかの欠落が認められるもの」すべてと定義している。ムルサルで伝承経路から氏名が脱落している伝承者は通常サハーバであり、サハーバは全員信頼できるとみなされていることから、特別な措置としてムルサルに関しては法的論証性を認めるという意見もある。アッシャーフィイーは、以下の条件を満たしているムルサルはサヒーフ・リガイリヒとして法的論証性を認めることができるとしている。

1. 伝承経路で預言者に最も近い位置にあるタービイー（ハディースを語ったサハーバの名前を、次の伝承者に伝えなかった者）が、タービイーの中でも年長の者であること。
2. 伝承経路において預言者に最も近い位置にあるタービイーが、信頼できる伝承者として認められていること。
3. 暗記力に優れた信頼できる複数の伝承者があるハディースを、そのタービイーと一緒に同じ伝承者から伝え聞いて、同じ伝承者に伝えていること。
4. 上記3つの条件に、以下の条件のうちの一つを加えた合計4つの条件を満たしていること。
 - a) 同一のハディースが、別の連続している伝承経路（「ムスナド」と呼ばれる）で伝えられていること。
 - b) 同一のハディースが別の伝承経路でもムルサルとして伝えられている場合には、後者においては問題とされるタービイーが前者とは異なる伝承者に伝えていること。
 - c) ムルサルとされるハディースが、別のハディースにおいてサハーバが伝えている発言に一致していること。
 - d) 過半数の学者がそれを法判断の根拠としていること。

ハディース伝達の適齢期に達していない年少のサハーバが伝えているものもムルサルで、特に「サハーバのムルサル」と呼ばれる。ただしこれはサヒーフとみなされている。また「隠されたムルサル」とは、実際に会ったことのある伝承者、あるいは同世代の伝承者から伝聞したとして、実際には伝聞していないハディースを他者に伝達したものである。こうしたハディースは、次に示すムンカティウの一種とみなされている。

②**ムンカティウ：**伝承経路に何らかの断絶が認められるものをいう。例えばスフヤーン・アッサウリーがイブン・イスハークから伝え聞いたという伝承経路があるが、両者の間でハディースの伝達が直接行われたという事実はない。イブン・イスハークからスフヤーン・アッサウリーにハディースが伝わる際には、両者の間にシャリークという伝承者が必ず介在していることが確認されている。このため両者間の直接伝達を示す経路を持つハディースはムンカティウとみなされ、破棄される。

③**ムアダル：**「困難に直面したもの」という意味で、二人、またはそれ以上の伝承者が連続して伝承経路から脱落しているハディースを指す。例として、マーリク・イブン・アナスがサハーバのアブーフライラから伝え聞いたというハディースがある。通常の経路では、両者の間にはムハンマド・イブン・アジュラーンとその息子が介在している。

④**タドリース：**「隠蔽」という意味で、専門用語としては「伝承

経路上の欠陥を隠蔽し、表面上は信頼できる伝承経路のように見せかけること」を指し、次の3種類がある。

1. **伝承経路のタドリース：**複数の伝承者から異なるハディースを聞いた者があるハディースについて、別のハディースを伝えた伝承者の名をその伝承経路に加えて伝え、実際にそのハディースを伝えた伝承者の名を抹消したもの。例えば伝承者Aがハディースbを伝承者Bから伝え聞き、同時にハディースcを伝承者Cから伝え聞いていたとする。この場合にAがbを伝承者Dに口伝するに際し「Cから伝えられた」とか「Cが語った」と言えば、伝承経路のタドリースとなる。Bに比べてCの信頼性の方が高いとAが判断した場合に、自分が他者に伝えるハディースの権威を高めようとして伝承経路に改変を加えるというのが、この種のタドリースの主たる要因となっている。こうした場合でもAは「私がCから聞いた」とか「Cが私に語った」と明言はしていない。こうした明言がされていれば、Aは改竄者というレッテルを張られることになるのである。さらにタドリースの実態解明を困難にさせるために、通常こうした伝承経路からは一人以上の伝承者が意図的に脱落されている。

2. **語り手のタドリース：**ある伝承者から聞いたハディースを他の者に口伝するに際して、他には知られていないその伝承者の名前や呼び名を適当につけて伝えたものを語り手のタドリースという。この種のタドリースの問題点は伝承者の不確実な特定化であり、上記のタドリースのような伝承経路の改変や、下記のような伝承経路からの削除というような作為は加えられていない。理由としては、タドリースの作為者にハディースを伝えた者の信憑性の低さ、ハディースを伝えた者の方がタドリースの作為者よりも年下、タドリースの作為者にハディースを伝えた他の伝承者に比べてその没年に開きがあり過ぎる、タドリースの作為者はその伝承者からあまりにも多くのハディースを伝え聞いていたためにその伝承者を指すに異なる名前を用いた等が挙げられる。

3. **平衡のタドリース：**あるハディースを伝え聞いた者がその伝承経路を調べた結果、ある信頼できる伝承者Aから信頼性に疑義が持たれている伝承者Bが伝え聞き、その者が別の信頼できる伝承者Cに口伝していたという場合に、Bを伝承経路から抹消して、そのハディースがあたかも信頼できる伝承者の間でのみ伝達されたかのように見せかけることを平衡のタドリースという。この種のタドリースが、最も劣悪なものとみなされている。

‘アン・アナとムアンナン：タドリースに関連して論じられる伝承経路の表現方法に「‘アン・アナ」と「ムアンナン」の二つがある。‘アン・アナはハディースの伝達に関わった者の名を、そのハディースを収集しハディース集を編纂した者に近い方から伝達の順に遡って並べ、各伝承者名の間をアラビア語の‘アンという辞詞で繋げたもので、例えば「ハディース・‘アン・ムハンマド・‘アン・アハマド」とあれば「アハマドからムハンマドを経て伝えられたハディース」という意味になる。この経路の連続性については、「その中にタドリースの作為者と疑われる者がいないこと」、「その経路の全体を通して前後の伝承者の出会いの可能性が存在すること」の2つの条件を満たせば、それをムッタシル（伝承経路が完全に連続している）とみなすことで学者たちの見解は一致しているが、その他の「前後の伝承者の出会いが確証できること」、「各伝承者間の交流期間が長いこと」、「各伝承者の素性がよく知られていること」という3つの条件については見解が一致しない。ムアンナンとは間接話を導く辞詞アンナを用いて伝承経路を繋げたもので、例えば「ハッダサナー・ムハンマド・アンナ・アハマド・カーラ」とあれば「アハマドが（次のように）言った、とムハンマドが我々に語った」という意味になる。辞詞アンナで繋がった伝承経路の連続性に関する学者たちの見解は、‘アンの場合のそれに準ずる。

⑤**ムアツラク：**前出のムアダルに似ている。ハディース集を編纂した人物に直接ハディースを伝えた者を含め二人以上の伝承者が連続して伝承経路から脱落しているものはムアツラクでありムアダルでもあるが、編纂者に直接ハディースを伝えた伝承者のみが脱落している場合はムアツラクでありムアダルではない。

（以下次号に続く）

マニラ・ハラール・フォーラムに参加して

イスラーム研究センター・シャリーア専門委員会委員長 武藤 英 臣
はじめに

本年6月フィリッピンでハラール・フォーラムが開催された。日本のハラール認証方式を紹介して欲しいという要請に応え講師の一人として参加した。フィリッピンでハラール・フォーラムが開催されるのは初めてという。

主催者は、マニラ市に本部を置くフィリッピン・イスラーム宣教評議会 (Islamic Da'wah Council of the Philippines = IDCP) という。この団体は、国内に数多くあるムスリム団体の一つで、弁護士アブドルラフマーン・リンザグ氏が1982年に立ち上げNGO登録したという。国内95団体を構成員とし、ムスリムの地位向上を目指し、ムスリム教育・医療活動、非ムスリムへのイスラーム啓蒙活動を行なっている。その活動資金はハラール認証発行収益に依存しているとのこと。東南アジア・大洋州イスラーム宣教評議会 (RISEAP) 加盟メンバーでもある。

フィリッピンは、一部ムスリムの独立運動にもみられるように南部地域は、圧倒的にムスリムが多数派である。しかし、マニラを含む北部地域ではまったくその逆である。また、南北間ムスリムで殆ど交流がない、と北部ムスリムが認めるように、非常に複雑な国内事情がある。

ハラール・フォーラム

「マニラ国際フォーラム・ハラール貿易と産業」と銘打ったフォーラムは、6月26日(月)マニラ市中心部にある「マカイ・シティ・インターコンチネンタル・ホテル」大宴会場で開催された。フォーラムには、フィリッピン政府、マレーシアのハラール推進活動家、シンガポール政府、

世界ハラール評議会加盟7団体が講演する盛り沢山のものではあった。一日で全部を終えようという意欲的な試みであった。会場の聴衆席は200席準備されていた。企業から派遣された150名ほどが集まった。学生や一般の出席は殆ど無かった。参加費を徴収したフォーラムであったため、すべて企業からの聴衆者とのことであった。フィリッピン国内で有名な「サンミゲル」、「ユニリーバ」、「味の素」、「ネスレ」等、合計60社から参加申込みあった旨、主催者はそれら企業名を一つ一つ紹介していた。

会場前方右側には、大きな垂れ幕が天井から掛けてあり、そこには「IDCPハラール認証製品製造企業」として、102社の名が大きく書き出されていた。

フォーラムは、朝8時から夕刻6時までびっしりと分単位でスケジュールが組まれていた。あまりに多い講演のため、途中の質疑応答時間は飛ばされ、閉会前30分ほどが質疑応答にあてられた。

「マニラ国際フォーラム・ハラール貿易と産業」実行プログラム

フォーラムで講演された主なものを講演者名と一緒に書き出してみる。

『ハラール認証』ムハンマド・サーデク：欧州ハラール評議会議長・世界ハラール評議会事務局長

『ハラール認証製品の世界市場における有望性』ベレンシタ・フルナンデス女史：フィリッピン共和国通商産業省輸出促進局広報部副部長

『ハラール食品認証に関する最新の科学技術』ヤコブ・チェ・

マー：マレーシア・プトラ大学ハラール食品研究所長
『ハラールの諸相』ヤスミーン・ホン・ハメスベルド女史&ヤスミナ・コウビア女史：オランダ・ハラール食品検査協会
『ハラール認証、日本の場合』武藤英臣：拓殖大学イスラーム研究センター客員教授

『食品品質に関する食品医薬品局の役割』オフエリア・アルバ女史：フィリッピン共和国食品医薬品局ラボ・サービス部主任・食品医薬品検査官

『乳製品の添加物』アブドゥラー・ファヒーム：アメリカ・イスラーム食品食物協会東南アジア&アジア地区総支配人(マレーシア)

『フィリッピン・ネスレにおけるハラール対応』エレアノール・ビリャリーニョ女史：フィリッピン・ネスレ調整室長【企業報告】

『シンガポールのハラール認証システム』シャハラーン・ハイラッラー：シンガポール・イスラーム評議会ハラール認証局長

『ユニバーサル・ロビナ社におけるハラール管理システム紹介』ジョビッテ・ヘルモスラ女史：フィリッピン・ユニバーサル・ロビナ社政府関係部課長【企業報告】

『ハラール認証米国のケース』アブドル・ハーギル：米国ハラール食品評議会SEA議長

『ハラール牛肉・鶏肉生産に関わる仮死と屠畜』ムハンマド・モーエルヒ：オーストラリア・ハラール認証協会議長



フォーラム終了時講演記念品を受取る筆者

質疑応答

閉会直前、質疑応答となった。一番多かった質問は、IDCPハラール認証は、有効期限が一年しかないのは何故か？有効期限を3年に出来ないか？少なくとも2年に出来ないか？というものであった。

本件に関し、IDCP議長は、現在の食品科学技術の進歩に対応するため、一年間でも長すぎる。ハラール維持に対し、抜打ち査察をIDCP側として行ないたいが企業側は歓迎しない。従って、有効期限を一年としている。一部の国の認証団体は、3年の有効期限もあるが、非常に例外的である。WHCメンバーの認証団体は、一年又は二年の有効期限としている。ムスリム企業と非ムスリム企業に対する対応が異なる。非ムスリム企業製品に対し、ムスリムとしてそのハラール性を確認するため一年間の有効期限としている。現在の方式を変更する予定は無い、と答えた。

次いで、多かった質問は、ハラール・ロゴに関するもので、世界中に色々なハラール・ロゴがあり、認証責任者が不明だ。統一出来ないのか？というものだ。

この質問について、サーディクWHC事務局長は、現在WHC内部で分科会を立ち上げ、世界ハラール規準を検討している。また、WHC憲章も準備している。その上で、世界統一ハラール・ロゴを制定すべく尽力中であり、もう暫らく時間が必要だ。WHCメンバーを知りたいならば、それぞれの国の認証団体に問合せれば判明する。フィリッピンではIDCPである、と答えていた。

お問い合わせ先：拓殖大学イスラーム研究センター
〒112-8585 東京都文京区小日向3-4-14
TEL：03-3947-2419 FAX：03-3947-9416
ホームページURL: <http://www.cnc.takushoku-u.ac.jp/>

拓殖大学 イスラーム研究センター ニュースレター

平成18年9月28日発行

発行人 拓殖大学イスラーム研究センター
編集人 イスラーム研究センター主任研究員
柏原 良英

Japanese Teacher Exchange Programme に参加して

池 上 裕

今回イスラーム研究センターの推薦により7月28日から8月4日まで、マレーシアで実施されたRISEAP (Regional Islamic Da'wah Council for Southeast Asia and Pacific)主催の"Japanese Teacher Exchange Programme"に参加したので、簡単に報告したい。

1. 「異」文化との接触

「異」とはラテン語で「numen」と言う。私たちはそれまで知らなかった文化や人間に出会うと「恐れ」と「興味・関心」を抱くのだが、それを「numen」と言う。

イスラームに関しては、確実に情報は増えているが、現在でもまだ十分ではないし、一面的なものも多い。従って、イスラームは、現代の日本人にとって「異文化」そのものであり、イスラーム教徒(ムスリム)は、「異人」とであると考えられる。

かつて、日本人にとってのイスラームとは、「千夜一夜物語」(シンドバッドの冒険等)、「月の砂漠」、「四人妻」ぐらいのものだった。最近では、「9.11」や「自爆テロ」報道の中、イスラームはテロ集団の集まりであるかのように思われ、漠然と怖いというイメージが流れており、正しい認識にはほど遠い。今回の「プログラム」の大きな目的のひとつは、一般の家庭に泊まって、ムスリムが、テロリストでもなければ鬼のように恐ろしい人でもなく、普通の人たちであって、普通の生活をしていることを知ってもらうことにある。つまり、ムスリムは恐ろしい「異人」ではなく、文化の違いはあるけれど、同じ人間なんだと言うことを理解することが求められていると言える。

一方、マレーシアの文化もまた、私たち日本人にとっては、「異文化」である。普通日本人がマレーシアを訪問するときは、ホテルでの滞在と観光、あるいは、リゾートで過ごすわけで、いわば「管理」された旅行であり、「異文化」を経験することはほとんどない。(過去二回マレーシアを訪れたときは、まさにそうだった。)

実際、今回の訪問でも、事前に提出したこちらの希望は考慮されず、「スケジュール表」もあって無きが如しで、当日になってみないと分からないことが多く、また訪問先も事前の連絡もせずに突然行くようで、日本的な発想ではいつくことになるだろう。また、翌日の予定を聞き、9時出発と言われたので、朝7時に起きたところ、実際は9時は起きる時間で、10時朝食で、出発はその後だった。また、家庭のトイレにはトイレトペーパーがなく(水で洗浄)、シャワーも水しか出なくて違和感があった。食事は、マレーシアの家庭料理で、「伝統的料理」がでた家もあり、朝から「ミーゴレン」とロールケーキ(?)の家もあった(びっくりした)が、家庭によって、また、世代によって料理に違いがあるのは、当たり前なこと(日本でも同じ)、そういうことも普通の家に泊ってこそ感じる事ができたといえる。

2. 宗教、あるいは、「比較宗教学」について

マレーシアは多民族・多宗教国家である。ムスリムが多数だが、ヒンドゥー教徒(インド系)仏教徒(中国系)も存在する。従って宗教についての関心が高い。例えば、ある学校を訪問したとき、案内してくれた

方から、日本の宗教(神道、仏教)について、いろいろな質問が出た。私は次のように答えた。「神社(神道)の信者はその土地に住んでいる人全員であり、〇〇神社の信徒は、引っ越せば、△△神社の信徒になるのであり、また、信仰対象も石であったり、木であったりする。また日本仏教は、(江戸時代の政策により)家の宗教は決まっているが、個人の信仰は自由である。」それ以上細かい質問が出なかったため、これで終わったのだが、更につっこまれるとこちらの語学力が問題になってこよう。「靖国問題」がクローズアップされているにも関わらず、自国の宗教についての日本人の知識はとぼしいと言える。学習していないと、関心がある人たちへきちんと答えられず、それで終わってしまうだろう。日本の宗教について、学習しておく必要性を痛感した。

また、大学での「MUSLIMA COURSE」に参加したが、そこでは「Comparative Religion」の授業が行われていた。講師はインド人で元々はヒンドゥー教徒だったのだが、ムスリムの女性と結婚するために、イスラームに改宗した人であった。(このことは、様々な意味で、日本人にとっては、大きな違和感を覚えるものであろう。)

しかし、そうであるが故に、できるだけ、客観的に各宗教の比較をしようとしていた。内容は、基礎的なものであり、やや資料の選択に粗っぽいところもあったが、たとえば、キリスト教の「三位一体説」批判のところで、友人のクリスチャンに「犬の子は犬である」ならば「神の子は神である」になるが、これで良いかと質問したところ、答えられなかったという話があった。これは、なかなか私たち日本人にない発想の質問でとても面白かった。

いずれにしろ、こうした「比較宗教学」は大切であり、大事にする必要がある。

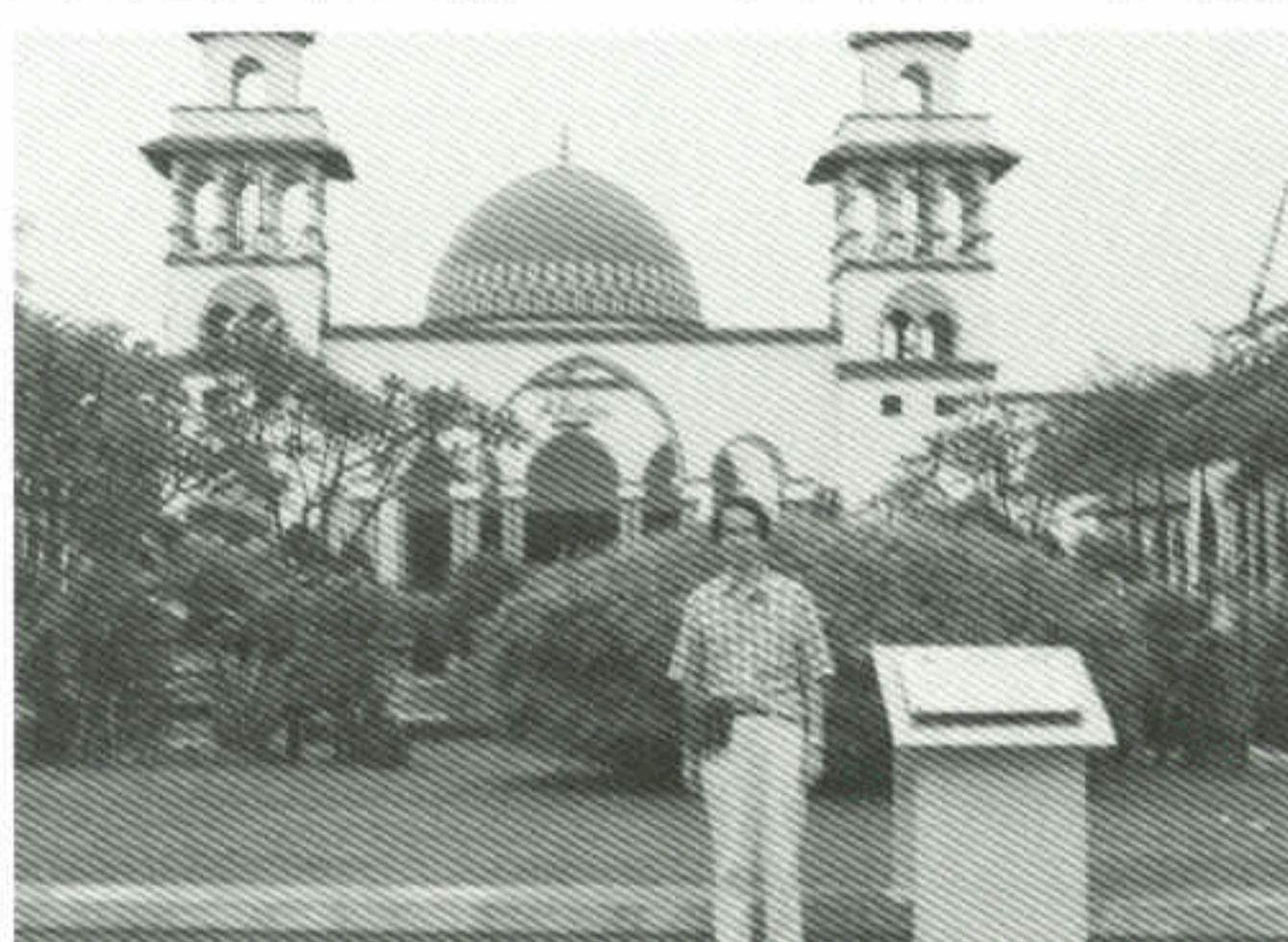
3. 宗教の多様性

この期間サウジで勉強している日本人ムスリムと一緒に行動することが多かった。サウジで生活しているだけに、その影響を強く受けていて、マレーシアのイスラームのありかたにかなりの違和感を持っていた。しかしサウジのイスラームだけがイスラームではなく、マレーシアにはマレーシアなりのイスラームがあろう。これはイスラームだけでなく、仏教でも、キリスト教でも同じであろう。こうした多様性を同じ宗教内で許容することが、他の宗教を理解し認めあっていく姿勢につながる。日本では、ムスリムが少数であるが故に、こうした態度を保つことがとても大事なことだと思われる。先の「比較宗教学」の担当者の有り様を大事にしたいと思う。

4. 最後に

今回二軒の一般家庭やモスクの「TRAVELERS ROOM」に泊ったり、また普通お会いできない多くの方々にも会えた。今回はクアラルンプールがメインだったので、今後は地方の家庭のありかたに触れられる機会があることを要望したい。

「RISEAP」のメンバーを始め、お世話になった方々、有難うございました。



モスクの前で